

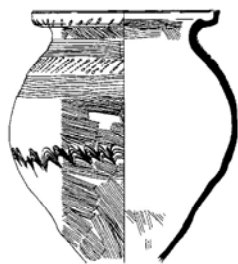
滋賀湖北地域における弥生時代後期集落の動向 酒井康介

弥生時代後期は、近江盆地の初期稲作集落の動向を見るうえで非常に大きな画期である。大型掘立柱建物を持った方形区画の出現など拠点集落の様相が変化するほか、一般集落も集落数や集落立地の面で様相は一変する。これらの動きは、近江盆地の内部で一様に進行したものではなく、地形や周辺地域との関係など多様な要素により地域差をもって進行していく。その中でも湖北地域は畿内・東海・北陸の結節点として近江盆地の中でも特殊な集落動態を示す。大半の集落が稲作を主な生業としていた弥生時代後期の集落動向は、当時の稲作技術を反映していると考えられる。その一方で、集落によっては交易に重心を置き、交通に有利な土地を選ぶものも存在したと考えられる。湖北地域において弥生時代後期の研究をおこなう上で問題となる点は、湖北地域においては編年が確立されていない

いということである。本稿では湖北地域土器編年を提示して時間軸を確立した上で、集落立地の分析を通して弥生時代後期の集落動向について見ていく。また、集落間交流がどのようなものであったかを探るため出土土器組成の分析もおこなう。以上の分析をおこなった結果、以下のような知見が得られた。

湖北地域において集落動向が大きく変化するのは - 2期、 - 2期、 - 4期の3時期である。

- 2期の画期は湖南地域など多くの地域において見られる傾向であり、湖北地域においても小規模ではあるが同様の傾向を示す。



受口状口縁甕
(今川東遺跡出土)

- 2期になると、湖北地域では扇状地にも集落の進出が開始される。これは近江盆地内部でも特異な様相である。要因としては姉川扇状地に広く分布する旧河道の存在によって、他地域と比べ水資源獲得が比較的容易であったためと考えられる。

湖南地域の野洲川扇状地においては旧河道が偏在しており、水資源確保は姉川扇状地と比べて困難であった。そのため、湖南地域の扇状地開発は扇端部に限定され、食料を他の遺跡に依存する特殊な遺跡のみが扇状地に進出する。

- 4期の画期には、遺跡立地の割合や平均標高の変化は見られないが遺跡数は急激に増加する。新たな地形に進出するというよりも、同様の地形内部で集落が拡散していくという様相が強い。扇状地帯の本格的な開発もこの時期の集落数増加に伴って進行するものと考えられる。

姉川扇状地の開発を担った郷里遺跡群が - 4期に活動を活発化させる理由としては、東海地域との交流が活発化する中で、交易ルート上の重要な土地に位置したということが大きい。郷里遺跡群扇状地帯に位置しながらも稲作が可能な土地であり、かつ交易ルートの要衝に位置したことから多様な情報をいち早く入手できたものと考えられる。郷里遺跡群は、東海地域との交流拠点として、天野川地域や、郷里遺跡群の琵琶湖沿岸部の遺跡は、琵琶湖を介した東西・南北ルートの拠点として、余呉・高時川地域の桜内遺跡は北陸方面との交流拠点としてそれぞれ役割を担っていた。そして、こうした多方面からの情報がはじめて出会うのが湖北地域であり、息長氏や、坂田酒人氏のような有力豪族を生み出す素地となったのである。